未来変化図

涼宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未来変化図

【Ｎコード】
Ｎ６３５７Ｄ

【作者名】
涼宮

【あらすじ】
あたし、涼森未来（スズモリミライ）は世界的に非認定の未来透視能力を持っている一般的な高校生。二年前の春のあたしの誕生日の３日前にある『組織』の人達が現れて、その内のイケメン二ヤケ面野郎がムカつく一言を言ったのよ。この物語はあたしのバトルと恋（？）の日々を綴ったものです。注意してご覧下さい。終わり！

第1話：プロローグ的な第1話

「ふーう…最近は変わった事も無いわね。普通でつまんないわ。まぁ…そんな大事でも困るけど…」

初めまして。あたし、涼森未来（スズモリ ミライ）。見た目は一般の高校生。でも、あたしには明らかに人とは違う体質…じゃないなコレは。うーん、何て言ったらいいんだろう…。

…能力……？うん、能力！

明らかに人とは違う能力を持っている。それは…

‘未来透視能力’

あー・・・なんかカッコよく聞こえるッポイけど、そんなスゴい事じゃないからね？ただ人の未来が見えるだけだし、見えても何も出来ないし・・・。

まあ、最悪の事態の場合はさすがに何とかするけどさ・・・・・。

未来が見えるって言っても、そんな遠い未来が見えるとか、自分の意思的に未来透視出来たりしないし。

その人の近い未来・・・次の瞬間とか何秒何分後に何か起こるとか、そういう事しか透視出来ない。見えないっていうか、一瞬パッてその人の未来が見えて、後は何も無いんだけどね・・・。

それで、この能力を持っているのはどうやらあたしだけじゃ無いらしい。二年前の春。あたしの誕生日の3日前に『組織』の人達があたしの所へ迎えに来た。

その『組織』の人達は、あたしに言った。

「あなたは神に選ばれたのですよ。選ばれたと言っても、ランダムですがね。ようこそ、お嬢さん。裏と闇の世界へ。歓迎はしませんけどね」

ナメてんのか、この野郎。何だよ、『選ばれたと言っても、ランダ

ムですがね』って！『歓迎はしませんけどね』って！！

ほんと、腹が立ったね、アレは。そのイケメンのニヤケ面に一発ブチ込んでやろうかと思ったね。

・・・・・・まあ、そんなこんなであたしはその『組織』にほとんど強制的に入った。

その『組織』っていうのは、人の未来をなるべくイイ方向へと持っていく事が役目。イイ方向に持ってくって言っても、その人の未来を変えちゃいけないのよ。

正直言って、めんどくさいわね。イイ方向に持ってくのに、変えちゃいけないってどういう事よ、みたいな。でも幸い、あたしの脳と精神は正常に機能してる。
今だって、ホラ。この訳分かんない世界のツッコミを入れる事だってできるわよ。なんでやねん。

ごめん。実はコレ、あたしが前読んで印象に残った本から抜粋した

の。いやー、面白い書き方だなーと思ってつい・・・ね？

誰だってこんな時くらい、あるでしょ。まあソレは置いといて。

それ以来、あたしはその『組織』で働いてる。あのイケメンのニヤケ面野郎はムカついたけど、給料は結構いいのよね。時給だけど。

それで、冒頭にあたしはイラ立ってたわけ。だってホントに最近何もないのよ？つまり、給料も出ないのよ！？時給だから。

あたしのサイフはすっからかんだわ。サイフはあるけど、中身がないのよ。あのイケメンニヤケ面野郎（メンドイので略した）とそっくりだわ。顔はいいけど、中身がまるでダメ。

やっぱり男は中身なのよ！人間、顔は変えられないけど、性格は変えられるでしょ？

しかも残念な事にあたしは最悪な奴とパートナーを組まされちゃったのよ。

さっきのイケメン二ヤケ面野郎。最悪だわ、本当に。

そいつ、顔は笑ってるんだけど何故かいつも言葉にトゲがあるのよねぇ。まあ、いつもあたしは自分を抑えて頑張ってるんだけどね・・・。

「おや、ここにいらしゃったんですね。探しましたよ。涼森さん。やっと仕事、再開です。良かったですね、自己破産は免れて」

ほら！！聞いた！？今のッ！ね！？トゲあったでしょ！！？

全く何なのかしら。あたしの事嫌いなのかしらね。だったらとことん嫌えばいいじゃない、ねえ？

ホントに読めない奴だわ。

まぁ、こんな感じでやってくから、これからよろしくお願いします！コレ見て『こんなもん、全然面白くねぇぜ』とか思った人は、これからは見ない方がいいかも。

ずっとこんな感じだからね・・・。

じゃあ、また会えたら会いましょう！！とりあえず、Ｓｐｅｃｉｌ

Ｔｈａｎｋｓ！！

第2話：未来変化図1

「涼森さん、どうかされましたか？体の具合でも悪いのでは？」

・・・うっさいわね。

「あの・・・聞いてます？」

聞いてないわよ。てゆーか、うっさいっってんでしょーが。黙りなさい。

「ちょっと・・・涼森さん！？」「だから、うっさいって言ってんでしょ！！何回言ったら分かるのよ！あたしはね、今暑くてイライラしてんのっ。あんまり怒らせないでくれる！？」

あ、しまった。思わず声に出ちゃったじゃないの。あんたのせいよ、このイケメン二ヤケ面野郎。

「『何回言ったら分かるのよ！』って、まだ一回も言ってませんがね。それに怒らせないでって言う前に既に怒ってらっしゃいますよ。それでは、こちらもどうしようも無いですよ？」

ほんとにウザイ奴ね。あ、すいません。なんか最初から機嫌悪くて。知ってる人もいると思うけど、あたしは涼森未来（スズモリ ミライ）、１６歳。二年前の春まで普通の高校生だったんだけど、突如現れた謎の『組織』の人達によって強制的にその『組織』に入れられた。

その中の一人だったのが、イケメン二ヤケ面野郎こと、甲斐田咲兎（カイダ サキト）。自慢じゃないけど、あたしは今まで一度もコイツを名前で呼んだ事がない。

いつも呼ぶとしたら、甲斐田。最悪の場合は「そこのキモいニヤケ面（野郎）」・・・ね。

不思議と甲斐田はそう呼ばれるのを嫌がらない。いっつもお得意の爽やかスマイルで「はい？」とか「何でしょう、涼森さん？」って返事する。

相当のＭなのか、もう慣れたのか。まあ、どっちでもあたしには関係ないけどね。

「どうしたんです？また黙り込んで・・・。今度こそ気分でも害されたのですか？」「気付いてると思うけど、あたしはあんたといる時で気分が良かった時なんてないわよ。むしろずっと悪かったわ」

すると何でか甲斐田はクスッと笑みを零した。吐きそうだわ。普通の人から見たら、イケメンが笑ってる様にしか見えないだろうけど、あたしからしたら、これ以上の地獄はないわね。

「・・・・・今、僕のこと、キモいって思いましたね・・・？」

「！！」

あたしは十二指腸が口から飛び出そうなくらい、驚いた。「な、何よ！いきなり！ビックリするじゃない！！今あたしの十二指腸が口から飛び出しかけたわよ！」

「あぁ、そうですか？でしたら今すぐ十二指腸を元の位置に戻された方がよろしいと思いま「わかってるわよ、そんな事！！」」

はぁ・・・つくづく思う。神様・・・

あたし、あなたに何かしましたか？

そんな事を頭の隅で考えていると、あたしと甲斐田の携帯が同時に鳴った。

「うぉわッ！！」「・・・・・・・」

あたしは今まで言ったことない声で悲鳴を上げた。

「え・・・何？まさか、指令！？」「・・・どうやら、その様ですね。しかも今までに無い程急速に時間が迫って来ています。土地柄からすると、その人物の一番近くにいるのは僕達のようです。どうしますか？」

は！？何言ってんだ、こいつ！

「どうするって・・・何をどうするのよ！」

「僕達には選ぶ権利があります。その人物を救うか、救わざるか・・・。その事を今あなたに問いているのです。もう一度聞きます。どうしますか？」

こいつ・・・時間が無いって時に慎重になりやがってぇ・・・・・・！！

「慎重になっている訳ではありません。その人物を助けても僕達の脅威になる可能性も考えられなくはない。そう言っているのです。それに、こうしている間にも、その人物にはどんどん危険が迫って来ています。早く答えを出した方がいいと思いますがね」

うるさい。・・・大体そんな事、聞くまでもない事でしょ。あたしは・・・

「・・・・・・甲斐田。あたしはあんたと組んだ時、言ったはずよ・・・」

それを言った瞬間、甲斐田が薄く笑ったのが見えた。だからキモいって言ってんでしょ。

「あたしは・・・相手が誰だろうと、悪の組織だろうが、そのうちにあたし達の敵になる奴だろうがかまわないって。その人は今危険な目に遭いかけてる・・・だったら、あたしはその人を救うまでよ！！その為の『組織』でしょ！？あたし達が所属してる『組織』は・・・・・・！！」

「・・・はい。全くおっしゃる通りですね。論理的には僕の完敗です。・・・まぁ、どう答えるか分かってましたけどね」

・・・・・・・・・・は？

「・・・じゃあ、何できいたのよぉー！！！これこそ時間のムダじゃない！！」「だって、いっつも一字一句間違えず言うものですから。面白くて、つい・・・」

「しかも私情ッ！！？何よ、それー！！」すると甲斐田は、またクスッと笑った。

「はいはい。申し訳ありませんでした。それより、もう時間がありませんよ？あと3分ですね」「3分！？こっからどのくらい距離あるのよ！？」

甲斐田は携帯を見て、「およそ1キロですね。まぁあなたなら大丈夫ですよ。何たって１００ｍを3秒で走るんですから」「走るかー！！！」

現場に着いたのは１６時３２分。出発したのが１６時３１分３０秒

だからホントに３０秒で着いちゃった・・・。甲斐田が言ってたのはマジだったのね。

甲斐田はにっこり笑って言った。「僕はいつも大いにマジです」

あっそ。あんたの意見なんか聞いてもないけどね。

あと１分３０秒。

「あっ！いた！！」

あたしは危険が迫っているひとがすぐに分かった。あ、そうそう。言い忘れてたけど、あたし達は危険が迫ってる人が何処の誰だか分かるってことになってるから。

「ちょいとお兄さん！！」「はい？」「そこにいると危ないですよ！上の看板落ちてきますよ！」「は？何言って・・・」

あたしはその人にタックルして場所を移動させた。その次の瞬間、看板が落ちてきた。

周りの人とか、その本人のその時の記憶は自動的に消去される。だからあたし達は安心して何でもできるってわけ。

「ふう・・・・・・何とか間に合って良かったわねぇ」「何とかって言うより、全然余裕で間に合ってましたけどね。あれは本当に凄かったですよ」

全然凄いって表現になってないわよ。

「いえいえ。本当にですよ。今回ばかりは肝を抜かれました。褒めたたえてもいいくらいですよ」

「別に褒めたたえてもらわなくても、どーでもいいわよ」

・・・あたしの事、どうせ嫌いなんだし。

そう言うと甲斐田は一瞬悲しそうな顔をして、すぐに無表情になり、真面目な顔で真面目に言った。

「・・・好きですよ。一人の女の子としてね」

「・・・・・・・・・・・・・」

「・・・？涼森さん？」

「・・・・・・・・・ぐぅ・・・・」

「・・・・・・人が勇気を振り絞って告白したっていうのに、告白された張本人が寝てるってどんな展開ですか・・・・・・ッッ・・・・」

すると未来は甲斐田に寄りかかって寝始めた。「！」

「・・・まぁ、いいですかね。今回は・・・・。未来もがんばったことですし・・・・・・」

その後あたしは魘されながらいい（？）夢を見た、と思う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6357d/

未来変化図

2010年10月21日10時42分発行